

新聞記者とことば

栗田 巨



「言葉は身勝手で、感情的で、残酷で、ときに無力だ。それでも私たちは、言葉のチカラを信じている」

私の古巣、朝日新聞がこんなCMを流している。

湾岸戦争の光景。9・11の無惨。パレスチナ自治区の紛争にまきこまれて逃げまどう少女。そうした映像が流れ、「ジャーナリスト宣言 朝日新聞」と結ぶ。

コラムニストの天野祐吉さんが「新聞社のCMというところ、いままでは販売拡張用のものが多かったが、こういうのが出てくるのはとてもいい。各紙がそれぞれの特長や主張をはっきり打ち出してくれたら、景品なんかにつられずに、自分の気に入った新聞を選べる」と紙上（連載「CM天気図」）で褒め、朝日も満足げに社内報で再録した。

むろん、ウィットとアイロニー豊かな天野さんのことだ。褒めつばなしでは終わらない。

「ま、どっちを向いてもひどい時代である。それだけに、朝日新聞にはがんばってほしいと思う。でも、

あんまり肩にチカラが入りすぎて、エンピツが折れないようにね」

と最後に軽くいなしている。社内報は、この部分は再録していない。ま、カワイイとおうか。

古巣では不祥事が続いた。懸命の巻き返しである。私も新聞川柳の選者としてなお紙面づくりに関係しているし、力いっぱい応援したい。

したいが、このCMにはどうも違和感がある。ことばは「身勝手に、感情的で、残酷で、ときに無力」なのだろうか。かりにそうであるとしたら「私たちは、言葉のチカラを信じ」られるのだろうか。

同期生（全員がすでに朝日を離れている）の一人は「空気が読めないのは相変わらずだなあ。テレビでもラジオでも、あのCMが流れると、面を伏せて穴にもぐります」とメールを寄越した。

焼酎のグラスを手にしてパソコンに向かっていた私は、すぐ返信した。「言葉は無力！ですか。なら廃業

せよ」

酔っていたせいで過激になったけれど、本心だ。こ
とばが「身勝手で、感情的で、残酷」とは、私は思わ
ない。「ときに無力」であるのかも知れないが、それ
を認めてはいけない。「ことばは力」なのだ。そうで
なければ、ことばに関わる仕事を続けることはできない。
などと当方も力んでしまったけれど、それはさておく。

四十年前に新聞記者になった当時、同業の人たちは
書くことが好き、ことばを自在に操る種族であって、
それが証拠に入社試験でも作文力（いまは論文力）を
重視するではないか、と私は思い込んでいた。

それでもあるが、そうでもない。経験を積むにつれ、
考えは微妙に変わった。

ことばを自在に操る記者は、もちろん何人も存在す
る。メールを寄越した同期生もその一人だった。いま
もフリーライターとしての彼のルポ、エッセイを雑誌
などでしばしば目にし、そのたびに私は「かなわな
いなあ」と唸る。

伸び伸びした筆致、的確な語彙の選択、明快な論理
と説得力。特にことばの選び方に感嘆した。自分には、
このことばは思いつけない。頭に浮かばない。なのに
彼は、軽々と操ってみせるのだ。つまるところ神さま
がそうした才能をくださったかどうかである。そう思
うしかない。

といて、あきらめてばかりもいられない。オのな
いはせいぜい努力するしかない。

量はついに質に転じる、と教訓を垂れた先輩がい

た。要は、たくさん書け、書けばそれなりに上達する、
ということ。畳の上の水練と同じで、文章読本のたぐ
いをいくら読んでもことばの操り上手にはなれない。
で、私も書いた。ときどきは、すごく書いた。その
結果、ほんの少しはうまくなったと思う。

いい先生にも恵まれた。

朝日は新人を一年生、二年生と呼ぶ習わしだった。
新聞社ということば商売の会社は、学校みたいな一面
をもっていて、原稿を出すと先輩（キャップ）や上司
（デスク）が寄つてたかつてあーだ、こーだと直す。
直し方がうまければ、学ぶことも多くなる。ほんの
ちよつと何文字か言い換えただけで、びっくりするほ
ど原稿のグレードが高くなることもある。お米を上手
に炊くと米粒がくつきり立つけれど、あんな印象だ。

指折ると一人、二人、ウン三人かしら、私にはい
い先生がいた。「○○の可能性がある」と私が書いた。
先生は「○○の恐れがある」と直した。「可能性」と
いうカタイことばから、「恐れ」という具体的な指摘へ。
これだけのことで、グレードは上がるのだ。給料をも
らって、ことばの磨き方を習っているようなものだっ
た。幸せだった。

幸せだったと過去形にしたのは、ああした徒弟教育
的な環境はいまでは微かにしか存在しないと思うから
だ。むろんコンピュータが全面に躍り出てきたため
である。

鉛筆で紙に書く。考え考え書く。それが原稿という
ものだった。先生はそれを青鉛筆で直す。どこをどう

直したかは、原稿を読み返せば一目瞭然だった（ついでながら朝日社会面に「青鉛筆」という小欄があるが、由来はこの青鉛筆にある。読者には、何のことかわかるまい。新聞のひとりよがりの象徴例だ）。

一目瞭然に話を戻すと、いまはパソコンで原稿を書く。パタパタとキーを叩くと、画面にことばが出てくる。昔は書いた文字で粗雑な原稿か否かがある程度わかった。昨今は無機質なフォントが並ぶだけ。

論説委員だったころ、規定の二倍も長い社説原稿を書いた同僚がいた。パタパタ叩いていたら、何となくそうなってしまったのだという。鉛筆ではあり得ない。引き締まった原稿は次第に姿を消し、行数ばかり多い水増し原稿が、必然的に増える。

さて、原稿をデスクに出す。昔は手渡しした。いまは親コンピュータに出稿する。デスクは親コンピュータから原稿を引き出し、自分のコンピュータで修正して最終出稿する。どこをどう直されたのか、筆者にはよくわからないままに。だから学ぶ機会も減りがちに
なる。

自分の手で、意識をもって、材料を吟味し、落ち着いて文章を書く。でない、ヒトサマに読んでいただけの文章にはならない。書いた文章は、できればひと晩寝かせ、推敲を重ねて仕上げる。

そのことが大切だと、不肖私にも近ごろようやくわかってきた。

ところが新聞記者の仕事とは、スピードとか繁忙とか締め切り時間とか、文章の練度を阻害することから

ばかり。カレライスのようにひと晩寝かせれば熟すなんてことは、夢のまた夢。よほど自覚して鍛錬に励まなければ、入社したときよりもかえって文章がヘタクソになる仕掛けになっているのだ。

けれども、しかしそれでも、私は新聞の「ことばの力」を信じる。

取材力、洞察力に優れ、ことばをプロとして操れる記者が一人でもいれば、新聞は十分に存在の意義、価値がある。そしてもちろん、そうした記者が一人しかいないなんてことは、私の知る限りあり得ない。

話は最初のCMに帰る。

「言葉は身勝手で、感情的で、残酷で、ときに無力だ。それでも私たちは、言葉のチカラを信じている」

この「言葉」を、「人間」に置き換えてみたい。「人間は身勝手で……それでも私たちは、人間の力を信じている」と。

ならば私も納得する。「ことばの力」とは、たとえば、こういうことではないだろうか。

栗田 巨（くりたわたる） コラムニスト。一九四〇年、東京生まれ。六五年、朝日新聞社に入り社会部記者、論説委員（社会一般・教育担当）などを経て九五年から六年近く朝日コラム「天声人語」担当、約二千本を執筆。現在、日本エッセイスト・クラブ理事、日本ナショナルトラス理事、朝刊掲載の「朝日川柳」選者（選者名・西木空人）。著書に『おとなのための漢文51』（河出書房新社）、『漢文を学ぶ（一）』（四）』（ポケット川柳）（童話屋）、『書き上手』（五月書房）ほか。

「ことばで生きる」力を育てる

——新刊『明解国語総合』のめざしたもの——

三浦和尚

(『明解国語総合』編集委員)



一、中・高の連続性

今日、義務教育段階の教育では、幼・小、あるいは小・中の一貫ないしは連携の必要性が叫ばれている。しかし、意外に課題として具体化していないのは、中学校から高等学校への連続性ではないか。

多くの地域で高等学校入学段階の学力差があるとすれば、中学とのつながり方は同じにはならない。A高校とB高校とは高校国語教育の出発点での具体的課題を共有しにくい。

そういう事態への対応として、高校教科書は、いくつかの種類が準備されてきた。到達点はともかく、出発点での生徒の実態にも配慮したものである。

しかし、いくつかの種類の中から教科書を選ぶに際して、現実には、おおむねどの高校においても、結果的にやや難しめの設定となる場合が多い。

こうしたさまざまな事情から、学校種・学年間の連続性という意味では、中学三年から高校一年の間のハードルがいちばん高いのはまちがいない、そこにこそ生徒の学習・発達の連続性という点で大きな課題があると言わざるを得ない。

二、「ことばで生きる」力

『明解国語総合』は、こうした問題意識に基づいて、高校国語教科書のバリエーションを広げようという試みであった。

私たちはこの教科書を必要とする学習者像を次のように想定した。

- ・ 中学での学びが必ずしも十分とは言えない。
- ・ 能力や関心の違いにより、多様な学びを必要とする。

そして何よりも、この教科書を用いて学ぶ生徒たちに、話題の追究や知識の獲得の過程で、「ことばで生きる」力をつけていきたいと願った。

ことばの機能については諸説あるが、伝達の機能のほかに、認識・思考の機能が大きな意味をもつことは明らかである。ことばで認識し、ことばで考え、ことばを用いて世界とかわり合っていく。国語科に求められている力は、そういう「ことばで生きる」力に他ならない。

三、『明解国語総合』の易しさと優しさ

結果として『明解国語総合』は、「易しい」教科書になった。少なくとも「易しく見える」教科書になった。

私は、例えば実力テストの問題は、同じ平均点であるならば、本文そのものが難しくてわかりにくい問題よりも、本文が易しめで、設問で考えさせる問題のほうが良質であると考えている。一読してわからない文章の内容を類推する力よりも、ある程度わかる文章の内容をさらに掘り下げて考える力のほうが、教育内容としてはまっとうだと思うからである。

このことを授業で言えば、生徒にとって取り付く島のない難しい文章について、その内容を教師が解説して終わる授業をよしとするのか、ある程度生徒に理解できる文章をもとに、発問等によってその内容の深さを発見していくような授業をよしとするのかの問題である。前者であれば、先生に内容を言い換えてもらっただけのことで、内容はわかるかもしれないが、読む力がつくわけでもなく、考えたり発見したりする喜びが生じるわけでもない。国語科の学習は、基本的には「ことばで考える力」の育成という視点を欠くわけにはいくまい。

大学の授業では、ご承知のとおり、例えば小学六年生の学習材「やまなし」(宮沢賢治)を文学としてまじめに取り上げている。六年生なりの理解や受け止め方

があり、大学生なりの理解や広がりがある。学びというものはそういう側面をもっているものであり、学習は「易しく入って深く出る 軽く入って重く出る」のが本物ではないか。わけのわからないものを突きつけて、「どうだ参ったか」というところから出発するものではない。

先に述べた「『易しく見える』教科書」というのは、「易しく入って深く出る 軽く入って重く出る」ことができる教科書という意味である。その過程で、ことばにこだわり、ことばで伝え合い、ことばで認識・思考する。そのことで「ことばで生きる」力の育成を図りたい。それが実現したとき、『明解国語総合』は、「易しい」けれど学習者におもねらず、学びの到達点を保障するという、学習者に対して「優しい」教科書となる。

四、『明解国語総合』の具体

……①全体の構成

『明解国語総合』は、原則として、1年4単位、または1・2年2単位ずつの履修を想定している。一人の教師が一つのクラスの国語の時間すべてを担当するという前提に立ち、現代文、古典、また「書く」「話す・聞く」という領域をそれ

ぞれにまとめるのではなく、教科書の初めから順番に学習するという構成となっている。中学の学習と同じような順序性があるので、学習の見通しを立てることができる。結果として、目次がモデルカリキュラムとなっているとも言える。

ただしそのことは、学習を固定的にするということではない。『明解国語総合』は本編と資料編の二部構成の形をとっており、資料編は「原稿用紙の使い方」などの便覧的ページと、「読書の森」による読書の広がりのためのページで構成されている。本編の学習の補完、補充、発展として資料編を用いることにより、学習者の実態に合わせた多様な学習を組織することが可能になっている。もちろん、特に文章学習材など、本編と資料編の学習材を入れ替えることで学習者に適応させることもできる。

……②学習展開への配慮

学習材は、「話す・聞く、書く、読む」また「言語事項」のいずれの領域・事項においても、中学校との連続性を強く意識した。また、学習に自信がなく、受身になりがちな学習者の存在を想定して、特に「話す・聞く」「書く」については、紙面も十分に取り、活動手順を丁寧に提

示して、なるべく具体的に活動しやすいように配慮した。「メモ取り伝言ゲーム」のように、実際に学習活動として成立する「話す・聞く」「書く」の学習材を目指すし、その充実を図っている。

「読むこと」の学習材においては、特に「教室で生徒たちが口を開く」ことを意識している。感想であれ意見であれ、生徒たちが教室で何か言いたくなるような状況、さまざまな考えを出し合ってみんなが深まっていく教室を願うためである。

そのために、学習材の内容そのものにインパクトを求めた。「水の東西」(山崎正和)、「羅生門」(芥川龍之介)といった定番の学習材は言うまでもなく、「希望」(大石芳野)、「緑のカイ」(岩瀬成子)、「緑——アフガニスタンとのかかわり」(中村哲)など、感動であれ疑問であれ、何か言うべきことがあるといった学習材を採録することに努めた。

またひとつは、「学びの道しるべ(学習の手引き)」を工夫することによってその実現を図ろうとした。「学びの道しるべ」は、紙面を広く取り、場合によっては書き込むこともできるようにした。その課題は、その順序で考えていくことにより、読むことの学習そのものが展開

できるように配慮・工夫されている。

……③古典の学習について
古典の学習材は決して多くはない。それは、想定される学習者の実態にかんがみでのことである。

古典の学習については、特に中学との関連を重視した。入門は「古典の響き」とし、「枕草子」「奥の細道」など、中学校で学習したものを置いて、高校との橋渡しを図った。生徒は安心して高校の古典の学習のスタートを切るようになる。

また、古文では現代語訳、漢文では書き下し文を積極的に配置した。それは、少しでも早く古典の内容に入り、その古典世界のおもしろさを味わわせたいと考えたからである。古典文法や漢文訓読の方法に習熟しないと内容には入れないという学習観にはくみしていない。

そのため、古典文法と漢文訓読の方法は、本編の末尾にまとめて提示した。適宜必要に応じて参照することができるとともに、逆に、全体像を視野に入れたまとまった学習が可能になる。

ただ、そういう方針で編集しながらも、古典学習を後退させてよいと考えているわけではない。そのことは、「木曾の最期」「桃花源記」など、内容的な重みのある

学習材を積極的に配置したことで具現化されている。古典学習にも、「易しく入って深く出る 軽く入って重く出る」という考え方は踏まえられている。

おわりに

『明解国語総合』は、既に中学校国語教科書として定評のある三省堂『現代の国語』を踏襲し、その学習を高校で受け継ぐ教科書として編集された。高校の先生方には、その判型、レイアウト、ルビの多さ、古典の扱いなど、抵抗のあるところかもしれない。

しかし、必ずしも中学の国語科学習において十分な到達点を得ていない生徒たちを念頭において、中学の学習からなだらかにつなぐという考え方を具体化すれば、自然にこういう形になると考えられる。中学から高校への移行のハードルの高さに十分に配慮した教科書が生まれたと受け止めていただければありがたい。

三浦和尙(みうらかずなお) 一九五二年、
広島県生。現在、愛媛大学教育学部教授・
附属小学校長。近著に『読む』ことの再
構築『国語教室の実践知』(ともに三省堂)
など。

多様な読みの実現

—「緑のカイ」—

「緑のカイ」は、すでに児童文学の世界では「朝はだんだん見えてくる」等で評価の定まった岩瀬成子の作品である。主人公の少女麻智は何年も前、空き家のプールの水の底に潜む「緑のカイ」と話すようになった。カイは全身緑色で、触ることはできない。大きくなったり小さくなったりする。そして何より、麻智にしか見えないのだ。

麻智がカイに会いにプールに行かなくなっておよそ二年半がたった今日、麻智は夜の商店街でカイに会った。

「ずっと待っていたのに。とうとうおれを忘れちゃったんだ。」

「おかげで、おれはこんなになっちゃった。」

「緑のカイ」は現実と非現実が交錯する不思議な物語である。それは、「羅生門」の非現実とも「山月記」の非現実とも違う、いわば不思議なりアリティのある非現実である。プールの底に潜む「緑のカイ」とは何か。読者はまずその疑問から思索をめぐらさざるを得ない。

授業ではその疑問を教室全体で共有することができる。そして、正解・不正解の枠を超えて、カイという存在について語らざるを得なくなる。

「緑のカイ」は、生徒に口を開かせ、多様に読むことを許容する作品である。口を開いたところから、読みの楽しさを味わわせたい。

(三浦)

白文
訓読文
書き下し文

漢文の白文を読むことは、学習指導要領では求められていない。漢文の白文を読むことは、実は中国語、しかも中国語の古語を読むことであり、国語科で外国語教育をする必要はないということであろう。

訓読文は、その約束にしたがって声に出して読めば、日本の古語である。その声を文字化すれば、書き下し文になる。読み下し、書き下してはじめて「国語」になる。

『明解国語総合』では、漢文学習に徹底して書き下し文を付した。というより、書き下し文に訓読文を付したと言ってもいいところがある。なぜか。

漢文の学習は、日本漢文を除けば、基本的に翻訳文学という学習材の学習だからである。その翻訳が、古語であるにすぎない。あくまでも「国語」として学習するのであり、中国語ではない。だとすれば、その学習は、

- ・ 翻訳文学としての享受
- ・ 漢文訓読体という古語の学習
- ・ 中国語を読みこなすという日本語の歴史の学習

という三つの柱で構成されることになる。漢文の内容や文体の楽しさ・すばらしさを前面にまず出そうとすれば、書き下し文で十分その目的は達成できる。

後は、生徒の実態に応じて、中国語をなんとか読もうとした先人の工夫にどこまで迫らせるかということである。

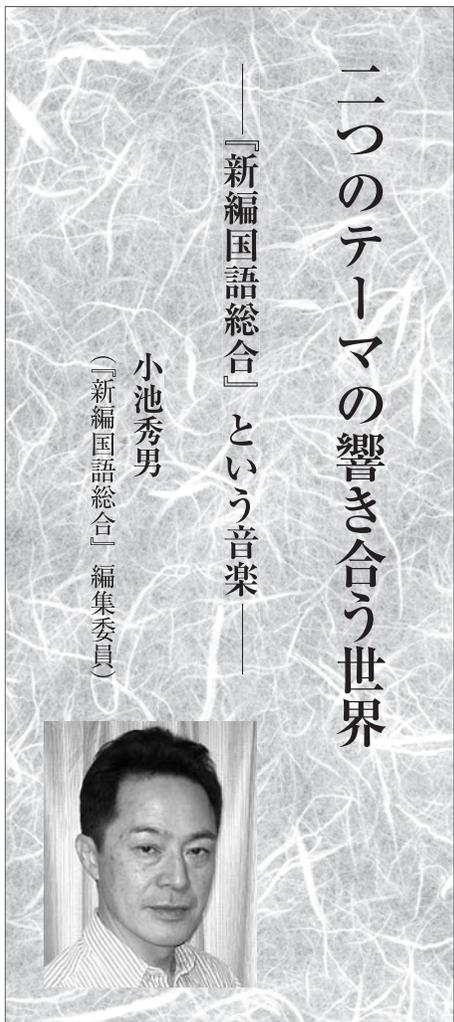
(三浦)

二つのテーマの響き合う世界

『新編国語総合』という音楽

小池秀男

(『新編国語総合』編集委員)



●長すぎる前書き

例えば、あなたの好きな楽曲の冒頭を思い浮かべていただきたい。

コンサートの始まり。期待に満ちた静寂の中から、最初の音が立ち上がり、ついで、静かに、あるいは華やかに、音楽が会場に満ちていくあの瞬間。最初のテーマが、少しずつ形を変えながら、パートからパートへと受け継がれ、音によって時間が紡がれ、音によって空間が満たされていく……。

音楽のことは人を人のことに置き換えることは、困難なだけでなく、あるいは無意味な試みかもしれない。しかし、音

楽に疎く、音痴を自認する自分にも、そうした瞬間に、音楽が語りかけるものが、音楽によってもたらされるものが、確かに存在するという実感はある。

高校の国語の教師になって三十余年、教科書の編集に携わるようになってからも十年ほどになる。

ともかくおもしろい教科書を、生徒と先生がそれをネタに興奮して語り合えるような教科書をつくりたいと、やみくもにやってみて、最近になってようやくわかってきたことが一つある。生来の鈍さを告白するようで、今さら言うのも恥ずかしいが、それは、国語の教科書というものは、数ある教科書の中でもきわ

めて特異な存在であるらしい、ということだ。

例えば、物理の教科書、日本史の教科書を想像していただきたい。それは執筆されるものである。それに対して、国語の教科書は、編まれるものである。編集委員が執筆する部分もないではないが、大半は、ひとさまの文章である。ひとさまの文章を、失礼千万にも、選定し、配列し、授業をイメージして方向付けるのである。これを僭越と言わずして、何を僭越と言おうか。

その僭越な行為が、とりあえず許されているのはなぜか？

無茶を承知で断言すれば、それはファンだからである。編集委員が、その文章の（教科書に置かれた形における）最初の読者であり、最初のファンだからである。もちろんそれは、ファンの甘えである。しかし、ファンとはそういうものだということも、暗黙の了解事項であろう。

とはいえ、ファンにも何もかもが許されているというわけではない。個人として楽しむのなら、どのように読もうが、どのように切り刻もうが自由である。しかし、一応教科書として出版される以上（一応！）、公的な説明責任は果たされね

ばならない。そのエクスキューズにおいて、私たちの乱暴狼藉は、辛うじてお目こぼしにあずかっているのである。

その説明責任のための文章を編集方針という。しかし、ここではそういうしかつめばった話題は避けたい。もっと自由に、穏やかに、そう、流れてくる音楽に身を委ねるように、この教科書の語りかけてくるものに耳を澄ましていただきたい。

●二つのテーマ

『新編国語総合』を音楽になぞらえて語るならば、この音楽は、二つのテーマとその変奏によって構成されている。

表紙裏の見返しから、口絵写真、冒頭教材である「水の惑星」に至る流れは、その緩やかな序奏である。そこで静かに提示されるのは、近代文明の行き着いた二十世紀に、われわれ人類が到達した自己認識のひとつのスタンダードである。それは、決して目を驚かすようなものではないが、それゆえに、未来を志向する静かな意志の表現となっている。

この教科書に流れるテーマのひとつは、このようにして提示される。すなわち、「スタンダード」である。それも、単な

るランク付けとしての「標準」ではなく、正統性を踏まえたという意味での「スタンダード」。

個々の教材の内容にも、教材の配列にも、学習の手引きの付け方にも、私たちがまず目指したのは、高校の教室のスタンダードであった。今回の改訂で、現代文では、随想を減らし、代わりに評論を増やしたのも、古文の内容を見直して日記や紀行を導入し、すべてのジャンルを網羅することを目指したのも、そうしたねらいの結果である。

このテーマに絡むようにして、少し遅れて二つめのテーマが始まる。もともと、それが明白に意識されるためには、もう少し教材を読み進んで、「ユー・ジーンへの旅」に至る必要があるかもしれない。

「読んで話し合おう」という方向付け自体がすでにテーマの一部であり、ユー・ジーンにおけるコミュニケーション・インテグレーションの現状報告という内容が、テーマの中核である。

ここで提示されるテーマは、「ユニーク」。本質的な意味での「ユニーク」。

この教材自体は、決して新しいものではない。最初に教科書に採録されたのは、十年ほど前の『新編国語I』であったと

記憶する。それ以来、一貫してこの教材は『新編国語』シリーズに採録され、シリーズのアイデンティティを形作ってきた。その内容は、十年を経て今なお古びていない。それどころか、時の経過とともに、ますますその問題意識は重要な意味をもつてきている。時代がようやく追いついてきたのである。

同様のことは、後半にある「ナガサキの郵便配達」にも言える。この教材もまた、三省堂が独自に教科書に採録して十年以上になる。現在の「国語総合」になって新たに採用した「読んで話し合おう」という位置づけとともに、この教科書のユニークな個性を形成している。

古文について言えば、「異界と出会う」と名付けられた単元に「ユニーク」のテーマは強く響いている。宇治拾遺物語から採られた二つの話は、教科書ではあまりなじみのないものではあるが、単に奇をてらい、生徒の興味に迎合したものではない。物語の起源が、まず不思議を伝えるものであったことを思えば、むしろ文学の伝統を踏まえたオーソドックスな教材選択であるとも言えよう。

漢文もまたしかり。「捜神記」による「復活」の物語が、まさに同じテーマを奏で

ている。

教材の配列についても、ユニークな仕掛けが見られる。カリキュラムに応じて、一年間使用にも二年間使用にも対応できるように、教材の配列は二つのユニットで構成されている。「現代文」でそれは最も顕著だが、「古文」にも「漢文」にも、緩やかな形でそれは意識されている。

● テーマの変奏

「スタンダード」と「ユニーク」。このふたつのテーマは、以上述べてきた以外にも、さまざまに変奏されて、この教科書のあちこちに響いている。

まず、現代文を見てみよう。たとえば、小説である。小説教材の、スタンダード中のスタンダード「羅生門」に配するのは、「草之丞の話」というファンタジーであり、手練れのストリーター太宰治のユニークな小説「猿が島」に配するのは、現代小説のスタンダード「みじりのゆび」である。

あるいは、評論である。評論教材のスタンダード「水の東西」とともに新しい評論「世界観の変貌」が置かれ、認識論、言語論のスタンダード「コインは円形か」

「言語は色眼鏡である」には、「情報と身体」というイキのいい現代評論が配されている。

古典を見てみよう。

冒頭に置かれる「古典の響き」は、組み合わされる写真とともに、それ自体がこの教科書のユニークな個性であるとともに、古典を読む楽しみの根底に、「調べ」や「響き」を味わうことがあるという当たり前の事実を思い出させるという意味で、スタンダードをも指向している。

同様の指向性は、「うたう心」の單元にも見られる。和歌のスタンダード「百人一首」とともに置かれているのは、高校の教科書にはあまり採られることのない歌謡集「梁塵秘抄」であり「閑吟集」である。古典文学の本流が韻文にあったことを思えば、このユニークな教材配列の中にも、古典文学のスタンダードへの指向性を認めることができよう。

漢文はどうだろうか。

たとえば、「漢文入門」に置かれた「五十歩百歩」の扱いである。多くの教科書が、故事成語として、前後の文脈から切り離れた形でこの小話を採録しているのに対し、この教科書では、リード文を使って前後の文脈を示し、そこにこの話を位置

づける形で読ませようとしている。全訳がつけられているのは、漢文初学者への単なる配慮ではなく、そうした学習を成立させるための積極的な方策である。当然のことながら、「手引き」もまた、それを踏まえた形で展開している。

● ファイナーレの後で

「スタンダード」と「ユニーク」。それは一見矛盾するテーマのように思われるかもしれない。しかし、この教科書を手に取り、この文章をここまで読んでくださったあなたには、このふたつのテーマは決して矛盾するものではなく、むしろ密接につながった一つのテーマのように感じられているのではなからうか？ 響き合う二つのテーマが相まって、全体として一つのハーモニーを奏でている、というほどのものではないにしても。

小池秀男（こいけひでお） 高校での三十年余りの教員生活ののち、昨春、養護学校に移る。ことばとことばのない世界との狭間で、人間とは何かを繰り返し自問する日々。

《談話室》

自分をひらく
ことば
世界をひらく
ことば

A君は十七歳。養護学校高等部二年生。大柄で、やや猫背気味。はにかんだような笑顔と穏やかな表情が印象的な自閉症の少年である。水泳部に所属し、全国障害者大会にも出場した。

パニックを起こすと、大声で叫んだり、自傷行為を繰り返すことも多い仲間たちの中で、彼の情緒の安定ぶりは際立っている。

彼のお母さんの話。

小学校に上がるまではしばしばパニックを起こしたことがあります。それが、小学校一年生の終わりに、パニックはほとんど影を潜めてしまいました。

小学校に上がる時点で、この子のもっていた語彙はわずかに十数語、それもマンマ、ブーブといった幼児語でした。それが、入学後の一年間で、一挙に十数倍に増えました。国語の授業で、先生と一緒に教科書を読んだのが大きかったと思います。独特のイントネーションで、教科書を暗誦する様子が、今でも目に浮かびます。

それ以来、パニックはほとんどなくなりました。自分の中のさまざまな思いを伝えることができるようになったか、それだと思っています。それまで、胸の中に渦巻く思いを伝えきれなくて、この子がどんなに苦しい思いをしていたか、それに気づいてやれなかったことを、親としてほんとうに申し訳なかったと思いました……。

自閉症の人たちの目に、世界がどのように見えているかをうかがい知るとはきわめて困難だ。自閉症の中でも知的な遅滞を伴わない人々、いわゆる高機能自閉症、中でもことばの遅滞を伴わないアスペルガー症候群と言われる人々の発するメッセージの中に、わずかにその手がかりがあるにすぎない。

言えることは、私たちが見たり、感じたりしているこの世界が、このようなものとは全く違ったものとして、見えたり、感じられたりする人々が、確かに存在するということである。

ことばが世界を分節するものであるとするなら、ものやことは、分節されて始めて存在する。言語が違えば、当然分節のしかたも異なる。私たちが、全く知らないことばを話す人々の中に置かれたときに感じる根源的な不安、居心地の悪さはそこに由来する。

自閉症の人たちの感じている困難、時にパニックとなつて暴発する不安は、それに近いものかもしれない。

安易な単純化や一般化は慎まねばならない。しかし、控えて目にも、A君の場合、ことばの獲得という事実は、彼の精神的な発達の要因として決定的だったのではないか。ことばは、自分を開き、世界を開き、自分とこの世界との関係を切り拓いたのである。

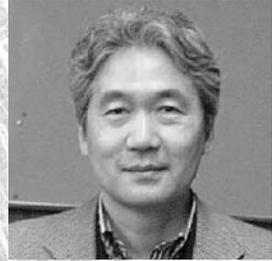
(小池)

深い問題系を提示する

『高等学校国語総合』のコンセプト

岩崎昇一

(『高等学校国語総合』編集委員)



三省堂は、平成十九年度版から三種の「国語総合」を揃え、多様化する生徒の学習実態に十全に対応することが可能となった。その中で『高等学校国語総合』（以下『高校国語』）は、特に大学進学を目指す生徒を対象に編集されたものである。このことを踏まえ『高校国語』改訂版のポイントを以下にまとめた。

新しい冒頭の顔

新たな出会いにふさわしい「おはよう」をめぐる竹内敏晴の随想「祝福のことば」と評論「水の東西」を並べて冒頭教材とした。旧版では二本の随想を並べてゆるやかな導入としていた。今回随想はこの一本にしぼり、「評論」学習へのステップを早めようとしたものである。「おはよう」は人と人とを結ぶ最初の言葉であり、祝福することばでもある。日常のあいさつに哲学者レヴィナスの考えが引用されて、意義深い考察になっている。さりげない言葉を介して他者と向き合い、相互に関係していくことから始まる高校生活をあらためて自覚させる教材である。また、随想とはいえ決して平易でない考察力が要求され「評論」読解への橋渡しになっている。「水の東西」は評論文の入門教材とし

て定評がある。東西の文化を「水」という身近でかつ象徴的な素材を使って論じたものである。文化を論じてつとに類型的に過ぎるとの意見もあるが、論理構成やノート整理法等で評論入門として有効な作品である。この二本の組み合わせによって、現代文授業の基本的な方針を立てられるものと考えられる。

充実した新評論教材

改訂では評論（二）として三本の評論文を採録した。まず西垣通の「情報流」は、「情報」を現代社会の「生命」のネットワークとして捉えなおす。「命あるもののつながりを新たな知見から解き明かすのが、情報学の役割」と論じ、「情報」の積極的な意味を見出そうとする評論である。近代的個人を絶対視する現代社会を生命進化のプロセスにまで立ち入って批判し、情報と人間社会の生きた関係・価値を見出そうとする。「情報」社会の単なる解説ではなく、情報社会に生きる意味、哲学を問いかけており深く考察するに値する評論である。

評論「命はだれのものなのか」（柳澤桂子）は、「生命論」という観点から採録した。自ら生命科学者である筆者自身の闘病

体験をもとに生と死を考察した評論である。現代医療における死の問題にも言及し「安楽死」についての小論文やディベート教材にも援用できる。

竹内啓の評論「地球の有限性と人間」は人口と環境との問題を、近年の信頼できるデータをもとに丁寧論じた評論である。「環境問題」への関心のたかまりとともに生まれる「人間文明の将来に対する悲観論」を退けて「人間相互の協働」を強調する筆者の論点は、「環境」論の指針となっている。また、当面する環境問題をわかりやすく論じ、長文読解の教材としても適している。

新「評論」教材は、いずれも現代評論の主要問題を具体的にわかりやすく論じた評論作品である。これらに、現行の評論「ものことば」（言語）、「見る―考える」（哲学）等をあわせて充実した教材選びとなっている。「国語総合」から「現代文」・小論文に発展していく際に必須の問題系として学習しておきたい。

翻訳を加えて充実した小説

小説「羅生門」と「少女」の並びは旧版のままとした。「羅生門」の採録は、各社とも変わらない。三省堂「高校国語」

では手引きや「指導書」が充実している。特に「羅生門」は高校で学ぶ小説教材の要と位置づけ、丁寧な（読み）の実際を提示している。小説「少女」は、「少女」のさりげない言動に微妙な心の揺れを読み取る好評の短編である。小説（二）に「富嶽百景」をおいた。旧版では小説（三）に配置してあったが、年間の授業計画で最も充実した時期に一人称小説の、語りの妙をじっくり味読できるよう配慮した。

また、小説（三）は「紫紺染について」に加えて、新しくティム・オブライエンの小説「待ち伏せ」を村上春樹の翻訳で採録した。ティム・オブライエンはベトナム戦争に従軍した経歴を持つ作家である。「待ち伏せ」は、「お父さんは人を殺したことがあるのか」という娘の問いに、いつか真摯に向き合おうとする「私」（父）が、「戦争の話」を語りはじめるという作品である。〈戦争〉体験を素材に時代状況や人間を考えさせる格好の作品となっている。

改訂ではそれぞれに特徴ある五作品が採録され、学校現場に合わせ適切に選択されるだろう。

新しい古文入門

「古典の響き」は音声の響きによって

「古典」の魅力に触れようとするものであり、現行のままとしたが、「古文入門」については、〈初めて古文を学習する〉生徒の立場に立って再考した。読みやすくわかりやすい定評のあるものから、説話「田舎の児、桜の散るを見て泣くこと」「後の千金のこと」「大江山」の三作品を選んだ。

「田舎の児…」は、桜の花の散るのを見て「さくりあげて『よよ』と」泣く「田舎の児」の涙の理由や、それに対する語り手の「うたてしや」の解釈を通して、「古文入門」を図ろうとするものである。「大江山」では歌合せの話題を通して古文世界への理解を深めておきたい。また「唐土の莊子」を話題とする「後の千金のこと」では漢文世界へのひろがりも考慮した。これらは、配当（単位）時間によって三作品を通して学習しても、何れか選択して先へ進むことも可能な並びとなっている。さらに「古文の読み方」・「古語の形と意味」では、仮名遣いや古語の意味や形、文語文法の基本を丁寧に解説した。また「古文の世界へ」では古典学習の意義を説き、採録作品への関心を深められるよう作品解説を加えた。旧版の「古文入門」がやや難解であるのご意見に応えて、

今回大幅に改訂したものである。合わせて「指導書」においても一層丁寧な作りを目指したい。

古文教材の充実

「国語総合」の段階で、すべてのジャンルの一通り学習させておきたいとの現場の声がある。「高等学校古典」に発展させるために、文学史を含めた基本事項を一年生のうちに習わせておきたいという考えだろう。大学入試対策として当然である。改訂ではこの点に留意して編集を進めた。結果として、「古文入門」（説話）、「徒然草」（随筆）、「伊勢物語」（物語）、「土佐日記」（日記）、「平家物語」（軍記物）、「和歌」、「奥の細道」（紀行）という並びになった。すなわち改訂版は「土佐日記」門出、黒鳥のもとに、帰京）を新たに加え高校現場の声に応えた。

基礎力の漢文

漢文教材は旧版のままとした。近年の入試問題を分析するに「漢文」問題に求められているのは、語の意味や用法・句法の習得など基礎力の習熟である。訓読法から中国古典文学の教養に至るまで、『高校国語』では基礎力の養成を目指し

て編集されている。「古文入門」と同様にはじめて本格的に「漢文」を学習する生徒の視線に立ち、「漢文に親しむ」（五十歩百歩）では、口語訳や解説をつけ平易で丁寧な切り口となっている。

合冊本として

「表現編」は現行のままとした。各単元に挿入するかたちで配列し、テーマを選択しても、「表現」学習として通しても利用できる。また、改訂版は「現代文・表現編」と「古典編」を一冊の合冊本としたことから、「付録」は巻末にまとめて置くことになった。

分冊か合冊かの判断は、「国語総合」の授業の持ち方や単位構成等で〈学校現場〉の実態によって意見の分かれるところではある。ただ『高校国語』の採用校が、一年生で「国語総合」を終え、二年次からは「高等学校現代文」・「高等学校古典」に取りかかる進学校が多いと判断し、この度の改訂では、一貫した編集方針が提示できる合冊本とした。

最後に、編集委員：

この度の改訂編集作業にあたって、数多くの候補教材を読んだし議論も重ね

た。もちろん採録をあきらめざるを得なかった候補教材の方が圧倒的に多い。教材の評価や選別の基準は、情報やデータをもとにした「編集委員会」メンバーの経験と判断に拠る。現行版に照らして新しいコンセプトや切り口を狙うという編集の方向性はあるものの、基本的には〈恣意的〉なものである。また、同一のテキストも〈読み〉によって価値が変貌する。その意味で出来上がった「教科書」は、今後も実際の使用者からの批判を受けなければならない。

とはいえ限られた時間や条件下で最善を尽くしたし、あらためて通読してみると〈良質のアンソロジー〉が出来上がったと自負している。今後は「指導書」や『高等学校現代文』・『高等学校古典』への架け橋をどうするか考えたい。

岩崎昇一（いわさきしょういち）高校の国語の教師となって二十七年、また国語教科書編修にたずさわって十数年になる。現在は、東京都立国際高校で、国語とともに小論文・受験指導にあたる

古典を遊び道具に
—パロディー作家の誕生—
細谷敦仁

「今は昔、金取の翁といふ者ありけり。生徒にまじりて金を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、〇〇〇〇となむいひける。……」

ある日、生徒から私の携帯電話にこのようなメールが届いた。『竹取物語』のパロディーである。取るに足らぬ内容ではあったが、授業で習った作品を丁寧に読み込み、それを遊び道具にしてしまった生徒の姿をほほえましく思った。

高校に入学してから本格的な学習が始まる古典は、多くの生徒にとってはやっかいな科目のようである。千年も前の文章をなぜ学ばなければならないのか、その意義が見出せず、さらには古典文法を高く険しい壁と感じ、それに手を掛けて登ってみようともせずに挫折する生徒も少なくない。そのような生徒たちと向き合うとき、わたしたち教師はどうやって彼らの古典嫌いの呪縛を和らげる手伝いができるだろうか。

あらゆる古典は、時人にとっては新作であった。それが長い年月の中で多くの人々に読み継がれ、現在に至っている。千年前の作品が突然今に復活したわけではない。その間には、連綿たる古典享受の歴史が横たわっている。生徒を教科書に載る作品と直接向き合わせるだけでなく、その事実の一端を示し、古典作品と彼らの間に一段でも二段でも階段を設けていくことは、彼らを古典享受者の一員とし

て育てていく上で意味のあることと思われる。

をかし、男ありけり。

……さる折しも、白き顔に帯と小袖と赤き、舟の上に遊びて飯を食ふ。渡し守に問へば、「これなん都人」といふを聞きて、

菜飯あらばいざちと食わん都人わが思ふほどは有りや無しやと

と詠めりければ舟こぞりて笑ひにけり。

江戸時代初期に書かれた『伊勢物語』のパロディー作品『仁勢物語』の一節である。「舟こぞりて泣きにけり。」(『高等学校 国語総合』二三〇ページ)の世界を逆手にとっている。『伊勢物語』に精通した作者が、古典の世界で自由に遊んでいる。

このような古典享受のあり方を生徒に見せることで、千年前の文章を前にしてがちがちに固まってしまった彼らの頭を、多少なりともほぐせるのではないだろうか。古典にやわらかに向き合うことができれば、古典を楽しむことはたやすいに違いない。

古典を遊び道具にした現代のパロディー作家は、その後も新作ができるたびにメールを送ってくれた。彼のやわらかい頭をうらやましく思うとともに、若い古典享受者の誕生に立ち会えたことをうれしく思った。

(『高等学校国語総合』編集委員)

古典学習の新しい可能性の模索

——『明解古典講読 日本の説話』の挑戦——



伊坂淳一

(『明解古典講読』編集委員)

高等学校国語科における古典学習の目的は何であろうか。世羅博昭「古典」(大槻和夫『国語科重要用語300の基礎知識』明治図書二〇〇一年)は、次のように簡潔に述べてくれている。

- (1) 「総括的目標」新しい文化創造の鑑として古典を読む意義を理解させるとともに、古典に親しむ態度を育てること
 - (2) 「内容に関する目標」古典の側から現代を相対化して、古典の中に日本民族の普遍的なものの方・感じ方・生き方を発見したり、また、現代が失ったものを発見したりすることを通して、現代を生きるための糧を得ること
 - (3) 「言語面に関する目標」古典の言語表現を読むことを通して、言語に対する感覚を磨くとともに、日本語についての理解を深め、言語生活の改善に役立つこと
 - (4) 「技能面に関する目標」古典を読解し鑑賞する基礎的な能力を育てること
- そして、「(4)の目標は(2)や(3)、ひいては(1)の目標を達成するための手段であるが、高校では、手段が目的化している実践が多い。」と指摘しているが、これはかなり重要な意味をもっている。
- つまり、古典学習材は本来、子どもた

ちの世界認識の枠組を広げたり、ことはを理解し表現する力を高めたりするための手段であったのだが、それを読み解くこと自体が目的化してしまっているのではないかと危惧しているのだ。

そうになると、古典の文章を「読める」ようになることが当面の目的とならざるをえない。もちろんこの場合の「読める」とは、かなりはしよった言い方をすれば、現代語に置き換えられること(＝現代語訳化)である。そして、古文単語や古典文法は覚えることが必要なものとなえられるようになり、古典学習自体が暗記分野にまた一歩近づく。その結果、子どもたちの古典離れはさらに進んでしまうことになる。

このような現在の古典教育の閉塞状態を何とかして打ち破りたいとの思いから、今回の『明解古典講読 日本の説話』の編集作業においては、次のような困難な課題を自らに負わせることとなった。

- 1 学習者が楽しく読めて、古代人の世界にさらなる興味を感じ取ることができる教科書

- 2 教室での学習において、内容理解のために過度のストレスを感じることなく、スムーズな授業展開が可能な教科書

3 古典学習を通して優れた言語表現のおもしろさや楽しさを感じ取ることができ、同時に学習者自身の言語運用能力を高めることができる教科書

楽しい古典教科書

第一の課題としてあげた、学習者が読んで楽しい古典教科書であることの最大の条件は、なんといっても「素材」のおもしろさである。幸いなことに本教科書の編集にあたっては、平成8年度版『古典講読 日本の説話』がベースにあった。ここに採録されている一つ一つの説話の内容的なおもしろさは群を抜いている。例えば、「百鬼夜行」「桜の精」「亀の恩返し」「夢を買う」「呪いを知らせた犬」「玄象の琵琶」「舞茸」など、人間世界と異形の世界との接点を描いたり、怪奇現象や非現実的世界を描いたりする作品は、ストーリー展開そのものに思わず引き込まれてしまう。「蜂飼いの大匠」「袴垂と保昌」「歌詠みの徳」「絵仏師の執心」「絵師と大工」「笛吹き成方」などに描かれた、際だった人間の興味深い行動や考え方には、驚いたり、納得したりの連続である。また、「応天門炎上」「義家と宗任」「行

成と実方」などは、歴史的な人物や事件に取材し、それに対する鋭い観察や時には辛口の批評を含んでいる。「恵心僧都の母」「後の千金」「姨母捨山」などには、人間の感情の機微や言動の規範、人生に対する教訓などが見事に表現されている。これらを含めた多くの学習材は、古代人の思考世界や超越的存在への思いも含めた世界観、あるいは歴史的事実の背景やその文学的作品化への熟成過程などに焦点を合わせることによって、総合的な学習へと発展していく、そのきっかけにもなりえる。

これだけの素材がそろっているのだから、あとは料理人の腕次第である。学習材の単純な羅列に終止することなく学習の進展を考慮して全体の構成を整えること、カラーページを拡張して学習に役立つ写真や図版をふんだんに取り入れること、活字のポイントを大きくすることも含めて見やすいレイアウトを試行することなどなど、課題は尽きなかった。その多くは形にすることができたと思う。

新しい学習活動を提案する古典教科書を

第二の課題は、冒頭に引用した世羅博

昭が挙げる古典学習の目標の(1)～(3)を実現できる教科書を目指すことであった。それには、授業時間の多くを現代語訳と古文単語・古典文法に割かれている実状に代わる、新しい授業形態を提案する必要がある。

そこで考えたのは、古典学習の導入段階においてよく行われている「現代語訳傍注」を、さらに徹底することであった。その現代語訳を横目でにらみながらであれば、古文本文がある程度はすらすらと読み進めていくことができるようにということである。

進学受験指導のクラスや国文学方面を目指す子どもへの指導においては、物足りなさが残るかもしれない。しかし、現実の「古典講読」教科書は、その採録されている素材にこそ違いはあれ、多くはほぼ同じようなつくりであることを考えると、多様な選択肢を提供することも教科書編集者としての責務であると思う。

「古典講読」は、必ずしも大学進学を目標としない子どもたちや、高校二年生以前を対象とする科目であってかまわない。むしろそのような子どもたちこそ、日本古典のおもしろさへの水先案内役となるべきである。そのためには本文の「解

「読」でつまづいたり、古文単語や文法の暗記で厭気を起こしたりさせたくない。

いかにいえば、授業時間の多くを内容理解と批判的な読みにあてて欲しいとの思いなのである。したがって、本文解説の負担軽減と引き替えに、「学習の手引き」を大幅に拡充することにした。原則として一ページをまるまる手引きにあてるとするのは、「古典講読」教科書においては、ある意味で異例である。もちろんここで、注目して欲しいのは、その量的な拡充だけでなく、やはり内容である。この点は次に述べる、第三の課題と密接にからんでいる。

「つとばの力をつける古典教科書

本教科書の編修作業が相当進んでいた段階で、経済協力開発機構（OECD）が二〇〇四年に実施した国際学習到達度調査（PISA）によると、日本の学力が著しい低下傾向にあることということが報じられ、話題となった。特に八位から十四位に大きく転落したというのが「読解力」であった。

PISA 調査の対象となった「読解力」とは、「自らの目標を達成し、自らの知

識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」である。

それはむしろ「総合的な学習の時間」によって育てようとした情報リテラシーであり、テキストに書かれていることを解積したり価値づけたり批判したりしつつ、その理解をもとに自分が考えたことを論述したり、表現したりする力である。

この「読解力」は国語科の中だけで育成されるものではない。実際に文部科学省『読解力向上に関する指導資料』（二〇〇五年十月）も、その指導例として他教科の例を豊富に挙げている。現在では「PISA 型読解力」という用語もかなり浸透してきたように思う。

国語科以外の教科で PISA 型読解力を高める指導が可能であるなら、国語科中の古典においても同じことができなければならない。新しい『明解古典講読 日本のお話』の「学習の手引き」が目指したことばの力とは、この PISA 型読解力でもあるといえるのではないかと考えられる。

つまり、「学習の手引き」を順次行うことにより、各お話の内容を簡潔に要約したり要点を端的に書き出したりするこ

と、また、そこに描かれている古代人の物の見方・考え方を批判的に受け止めたりと、古代世界のあり方について対比的にとらえたりすること、あるいは、物語の描かれ方そのものの特徴や説話採録者の視点を考えたりすること、などが授業の中で自然に実現されるような学習課題の提示に努めた。

そして、自分が考えたことの表現方法を明示的に示すこと、情報を分析するための視点や考えるためのヒントを具体的に示すこと、学習者同士の意見の交流を促すように配慮することなどにも意を注いだ。

「古典講読」の新しい可能性を模索する試みは、まだはじまったばかりである。多くの方の忌憚ないご意見により、この教科書がさらに成長することができたら、それこそ教科書編集者としての無上の喜びである。

伊坂淳一（いさかじゅんいち）千葉大学教育学部と教育学研究科で担当している授業の中で、古典教育の現状を克服して新しい方向を目指す学習材について、学生諸君とディスカッションを続けている。この教科書にも、多くの意見を探り入れることができた。

魑魅魍魎の闇を切り開く

—古典の継承と再生—

京都市外の北西、修学旅行で有名な二条城の北の、堀川通を西に少し入ったところに晴明神社がある。至る所に霊界との通路が口を開き、魑魅魍魎が跋扈していた平安京の、その影の支配者ともいわれたスーパーヒーロー、最高にして最強の陰陽師、安倍晴明を祀る神社である。そもそもは、晴明の邸宅跡ともいわれ、近くには一条戻橋がある。晴明はその橋の下に、呪術に使うための式神を隠していたというのである。

安倍晴明は、夢枕獏氏原作のコミックス『陰陽師』によって、数年前に大ブレイクした。さらに第一部、第二部と映画化され、野村流狂言師の若きエース野村萬斎氏が晴明を演じて話題となった。なかなか色気がある、しかしどこか胡散臭さも漂う晴明役がはまっていて、かなり楽しめた。伊藤英明氏の源博雅も好感が持てた。

もちろん現代風にエンタテインメント化されたストーリーには、かなりの脚色が入っていた。古代史に登場する人物や事件の因果関係は、やはりそこは大胆な作り物の世界である。ただ、その端々にはあるが、晴明にまつわる古典説話に描かれたエピソードが、小道具として登場することに、たいへん興味を覚えた。

例えば、当時の政権の中心人物である藤原道長の暗殺を企てた者が、道長に瓜を献上するが、晴明はその中に密かに隠された蛇を見つけ出し命を救った話とか、広沢の池の

蛙を草の葉を投げて呪殺した話とか、陰陽師としての晴明の能力の高さを語る場面に出てくるのである。

『明解古典講読 日本の説話』に収載されている晴明説話は、「呪いを知らせた犬」である。道長が法成寺の門を入ろうとしたとき、かわいがっていた白い犬が袖をくわえて異常に吠え立てる。道長が晴明に占わせると地中から呪いをかけた土器が発見されたという話である。

犯人探索のために、晴明が紙を鳥の形に折って投げ上げると、たちまち白鷺になって飛んでいき、呪詛の張本人である芦屋道満のもとへと落ちるのだが、この「紙を鳥の形に折って投げ上げ鳥に変身させる」というモチーフも、

しつかりと映画の中に使われている。

コミックスや映画は現代の作り物であり、古典文学とは無縁であるといってしまうまでもである。しかし、このような、古典を読んでいればこそその楽しみ方もたしかにあるのである。(伊坂)



教室よ、よみがえれ

——『国語表現Ⅰ』がめざすコミュニケーション——

細川英雄

(『国語表現Ⅰ』編集委員)



自分にしか関心のない生徒たち

ほとんど毎時間の遅刻、クラス内の私語、飲食、自己主張のわりに決まりを守らない、何事も中途半端、そのくせ単位だけはほしがる……大学教養課程のクラスながら、なぜ彼・彼女らは、日本語のクラスに真剣に取り組もうとしないのか。

もし内容的に興味のあること、彼・彼女らが全身全霊で打ち込めるような学習環境が用意されるなら、状況は変わってくるのではなからうか。

新しいクラスを開設するに当たって考えたことはこんなことだった。しかし、そのためには、どうしたらいいのだろうか。

この「国語表現」のテキストの考え方

がどれだけ通用するかを試してみるのも、このクラスの目的であった。

そのためには、とにかく彼ら一人一人の話を聞こう。そこで、何が始まるか、そこからこのクラスは始めてみよう。

これが担当者としての私がまず考えたことだ。つまり、教室を彼らの居場所として保障できるかということだった。

ここで最終的に立ち上がってきたのは、彼・彼女らの「自分さがしの旅」だったが、「教室よ、よみがえれ」とは、彼らへの期待のことばであり、自らへの励ましのことばでもあった。

ここでは、このクラスのことを振り返りつつ、今、「国語表現」のめざすものについて改めて考えてみよう。

なぜ自分にしか関心がないのか

では、生徒自身が何かを考えること、生徒自身に何かを考えさせることは、具体的にどのようなことか。

「国語表現」の担当者からしばしば持ち込まれるのは、「子どもたちは自分しか興味がない」という苦情である。

しかし、「自分にしか関心のない生徒」にとつてこそ、こうした方法は有効なのだ。

ことばを身につけようとすることはすなわち他者との関係づくりの活動でもある。

この場合の他者とは「私」にとつて常に了解不能の存在、つまりブラックボックスである。他者が何を感じ、考えているのか、「私」にはわからないし、その行動も予測できない。したがって、他者とつき合うことは、「私」を不安にさせ、その不安のために、他者に対し「私」はなかなか自分を開くことができない。

「自分にしか関心のない生徒」が、自分のことにしか興味を示さず、自己の世界に閉じこもりがちなのは、他者に対して自分を開くことができないからだろう。

そういう生徒にとつてこそ、一方向的な教授活動から、生徒自身が考える活動へと、教室における「他者との関係

づくり」が必要なのだ。生徒の考えていることを引き出すという行為は、限られた生徒にだけだからできるわけではない。むしろ、一方的な授業を聴き、自分のことばで語る喜びを忘れた生徒にこそ、有効なのである。

生徒自身の考えていることがテーマ――

今までは、「教えるべきもの」が教師の側に厳然と存在し、それをどう教え、理解させるかが教師にとつての課題だった。教え・教わる状況下では、どのように話し掛けたところで生徒が答える機会も、意識も、さらにはテーマも生じなかった。だからこそ、生徒は自分のことにしか興味を示さず、自己の世界に閉じこもってしまうのだ。

問題は、そうした生徒一人一人の生活意識のところへ、担当者がどのようにして踏み込んでいけるかということだろう。なぜなら、与えるべき、そして頼るべき教材のない状況の中で、担当者はあらかじめどこかで決められた答えを用意することはできないからだ。

むしろ自らの問いを立て、この問いの答えを見つけて出す作業を通して、生徒自身が自分のことばを発見するのを担当

者は側面からサポートするしかない。担当者もその答えがどこにあるかはわからない。

情報をわがこととする力――

教室においては、優れた教材が必要だと考えられてきた。いい教材がなければ教えられない、いい授業のためには優れた教材が必要という教師の声はまさにこのことを反映していると思われる。

しかし、本当にそれでいいのだろうか。人はいろいろな場面・状況の中で他者とコミュニケーションしながら生きている。この複合的かつ重層的な場面連続の中でことばは獲得されていく。この場合に必要なのは、情報としての「教材」ではなく、身のまわりのさまざまな情報による学習によって、わがこととして考えていく力ではないだろうか。

教育の主体が教師であるのに対し、ことばによる学習の主体はあくまでも生徒自身である。しかも、生徒にとって一番重要なことは、自分の「考えていること」を、ことばを用いて表現しようとすることだ。このとき担当者のできることといえば、教室という空間でどのようにして生徒自身の「言いたいこと」を見出し、

それを本人にいかにか表現させるか、である。だからこそ、「考えていること」「言いたいこと」を表すことばは生徒個人の中にあるのだ。

教材や技術では、ことばの力はつかない――

教材を与え、それを解釈させるだけでは生徒自身のことばの力はつかない。また、ことばを自己の中にあると認めつつ、それを表すのに必要なことを単なる技術とのみ考えるならば、それは思考とはかわりがなくなる。しかも現実にはそのような知識や技術だけでは生徒一人一人のことばの力がつかないことは担当者ならだれにでも体験的にわかっているはずだ。そこで、生徒自身がながしかのテーマを見出すためには、自らのことばを用いて考え表現できる言語活動の場、すなわち生徒にとつての具体的なコミュニケーションのための環境設定が必要となる。

つまり、生徒と担当者が対等の立場で、ダイナミックな言語活動に参加する場を形成するための方法論は、いかにして生徒のための言語学習環境を設定するか、という問題に集約されるだろう。

問題を発見し解決する学習とは？

生徒一人一人が自分のやりたいことを探し、そのテーマに基づいて活動する中で、生徒自身が自己表現を図っていくという筋道を問題発見解決学習と呼ぶことにしよう。この問題を発見し解決する筋道自体は、担当者が有る程度つくつてやらなければならない。

例えば、レポート集作成という活動の場合、自己紹介に始まり、それぞれのテーマ設定、取材、クラス発表、討論、推敲、提出、相互評価といった一連の活動の枠組みはすでにできているわけだから、「何をテーマにするか」は、生徒一人一人の提案を待つしかない。

この問題発見解決学習は、今までの教室にありがちだった即座の反応を期待しない。もちろん、生徒のつくりだす意図と場面に応じた適切な表現を提示することとはあるが、その表現教育が目的ではない。一定の限られた期間内で、生徒自身が自分で考え、それを自分のことばで表現するのを担当者はじっと待つのだ。生徒のことばは、たどたどしくてもかまわない、あるいは多少まちがっていてもいい。コミュニケーション活動能力を獲得す

るのは、生徒自身である。それは、生徒自身が自らの考えていることを他者に向けて表現しようとする意思において、はじめて立ち現れる能力である。話し手としての生徒が自分自身の思考と表現をどう結ぶかということに直面したとき得られる力でもあるはずだ。

自分の居場所としての教室

このように、教室で問題にしなければならぬのは、架空の存在としての「社会」ではなく、具体的な対話者の「他者性」そのものなのだろう。だからこそ、コミュニケーション活動能力を育てる言語教育とは、個を含めた、さまざまな社会形成の中で他者とのコミュニケーションによって自己を表現する力をつけることである。そのことによって、自分を自分として確認できるような、もっと簡単に言えば、「ここにいてよかった」という自分の居場所としての認識をもつことなのだ。

自分の居場所としての認識とは、さまざまな他者との出会いでの種々のズレあるいは違和感を経験することによって成り立つとも言える。この場合、ズレあるいは違和感、解消されるべき障害や

トラブルなのではなく、人間のコミュニケーションに当然あるべきこととして把握される事柄である。なぜなら、こうしたすべての差異があつてはじめてコミュニケーションが成立すると言えるからだ。そこでは、「人はすべて同じ、しかし、すべて違う」という態度が必要となる。そのような認識態度がなければ、異なるものに対して柔軟に対応することはできない。

コミュニケーションにおける「異なるもの」として他者を捉えることは、新しい個と個の信頼関係における、ゆるやかで友好的な連帯を創造することでもある。そして、その他者とのコミュニケーション活動能力を体得しようとする生徒のために、学習空間をどのように組織化し一人一人をいかに支援していくことができかが、ことばの教室とその担当者に与えられた使命だと言えるだろう。

細川英雄（ほそかわひでお） 早稲田大学大学院日本語教育研究科教授。専門は、言語文化教育論。母語としての国語教育と第二言語としての日本語教育の接点を模索しつつ、新しい言語教育のための設計デザインと実践プランの作成を提案している。著書に、『日本語教育は何をめざすか―言語文化教育の理論と実践』（明石書店 2003年）など。

やればわかる
「新聞に投書してみよう」
の充実度

高野光男

教科書がさまざまな教室での使用を想定して編集される以上、最大公約数的な教材化が求められるのは、教科書の宿命といってよいだろう。だから、教師は教室の実態に応じて、その教室に適した授業の進め方を工夫しなければならぬ。それは教師の重要な仕事のひとつだし、ここで教師の力量も問われ、それゆえに授業がうまくいったときの喜びも大きいのだ。

だが、「新聞に投書してみよう」という単元の場合ほとんどの教室でも、教科書どおりの手順で行えば、十分に授業展開が可能である。そもそもこの単元の原型自体が実際の授業から生まれ、さらに編集段階でのブラッシュアップを経ることで、課題の指示から使用するプリントに至るまで、実に取り組みやすくてでき上がっている。それでいて、生徒の反応もよい。多くの先生から取り組みやすい教材であるとの評価をいただき、各地の国語研究会で実践報告も現れてきている。

最近の例では、NIEの実践を進めている菊池陽子先生のすぐれた授業レポート「NIE―続・国語科における私の実践」が『月刊国語教育』東京法令出版、二〇〇五年三月に掲載されている。菊池先生の授業は、レポートにもあるように、三省堂の『国語総合 現代文・表現編』のワークシート（『国語表現Ⅰ』とほぼ同じである）をそのまま利用した、高校一年生全員が新聞投稿に挑戦するという授業で、

レポートからは生徒が生き生きと取り組む様子が伝わってくる。もちろん、これは菊池先生の経験に裏打ちされているからで、先生の授業を参考にすればさらに充実した授業実践が可能となるだろう。

投書は意見文の一種なので、堅苦しく、またむずかしい教材という印象をお持ちになる先生もいるかも知れない。しかし、授業を行ってみるとこれが全然、違うのだ。自分が書いた意見文が教室という閉域を超えて読まれるというリアリティ、いわゆる「実の場」が所与のものとしてある。また、体験に基づいて意見を述べるという思考のかたちが、高度情報化社会が強いる「情報から思考へ」という回路と異なっている点も、現代を生きる生徒のことばの学習として大きな意味をもっている。しかも、実際に生徒の投書が新聞に載ったりすれば、学習意欲を喚起するという点で、その教室だけでなく、別の教室、さらに別の学年へと波及していく効果もある。

百聞は一見に如かずで、先生方には、ぜひ取り組んでみていただきたいと思う。

（『国語表現Ⅰ』編集委員）



筆者が平成16年度に取り組んだ授業で、新聞に掲載された3名の投書。

三省堂

高等学校国語教科書ウェブページ

http://tb.sanseido.co.jp/kokugo/kokugo/index.html

ことばと学びの宇宙

1つ戻る ホームへ 検索 更新情報 データダウンロード サイトマップ お問い合わせ 使い方 ヘルプ

国語の世界 — 小学・中学・高校・国語教育情報 辞書の世界 ひろがる学びの世界 教科書新時代 英語の世界

現在のページ ▶ [ことばと学びの宇宙ホーム](#) > [国語の世界ホーム](#)

国語の世界 — 小学・中学・高校・国語教育情報

国語教室の実践知 国語教室の実践知 一確かな学びを支える25のキーワード

2006年新刊 『現代の国語』 サポート書籍

「読解力」とは何か PISA調査における「読解力」を核としたカリキュラムマネジメント

ことばの季節 4月 入学式 an entrance ceremony

教職 「総合演習」テキスト 2006年2月15日発行

教科書クロニクル 高等学校国語教科書版

小学校国語情報

- 小学校教育関連リンク集
- 小学校国語サポート書籍
- ことばクイズ

中学校国語教科書 『現代の国語』

- 『現代の国語』 基本情報
- 学習材別リンク集
- 学習指導計画作成のために
 - 指導計画・評価資料
 - 移行措置資料
- 授業実践紹介
- ホットラインQ&A
- 『現代の国語』 指導書
- 『現代の国語』 教材
- 『現代の国語』 サポート書籍
- 教科書クロニクル

中学校書写教科書 『現代の書写』

- 『現代の書写』 基本情報
- 学習指導計画作成のために
 - 指導計画・評価資料
- 学習指導書
- 書写関連リンク集
- 参考資料一覧
- 学習指導要領（国語科書写）

高校国語 教科書情報

- 国語教科書の紹介
- 国語教科書の展開例
- シラバス案・評価規準例
- 学習材関連リンク集
- 指導教材
- 共通教材
- 高校国語サポート書籍
- FAQ—よくある質問
- 教科書クロニクル（高校版）

国語教科書の紹介

国語教科書の展開例

シラバス案・評価規準例

学習材関連リンク集

指導教材

共通教材

高校国語サポート書籍

FAQ—よくある質問

研究情報

各種コンクール情報

教科書クロニクル

など、役立つ豊富なコンテンツを満載

お問い合わせは、h-kokugo@sanseido-publ.co.jp

三省堂高校国語教育 2006 年夏号

6月15日発行

定価 100円（本体95円）

〔編集・発行人〕 八幡統厚

〔発行所〕 株式会社 三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2丁目22番14号

電話／東京 03(3230)9438（編集） 振替／東京00160-5-54300